

令和 3 年 4 月 28 日現在

機関番号：62618

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05612・19K20818

研究課題名（和文）日本語教育支援のための中学校社会科教科書の言語的困難点に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Junior high student Japanese language support needed to understand social studies textbooks

研究代表者

宮部 真由美（Miyabe, Mayumi）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・プロジェクトPDフェロー

研究者番号：60823383

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の支援を必要とする中学生が社会科教科書を読むためにどのような言語的な難しさがあるのかを調査した。

まず、中学校社会科の地理、歴史、公民について、これらの教科書をテキスト化し、茶豆という形態素解析のソフトを用いて、教科書にどのような語彙や文法が使われているかを調べた。そして、述語部分に注目し、どのような述語を用いて書かれているかを調べ、これらの述語と記述の仕方との関係を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会科教科書の日本語の難しさについて、先行研究ではどのような語彙があるのかという語彙面に関する研究が多いが、本研究で日本語支援を必要とする中学生という視点からどのように用いられているのかという文法面からも分析を行った。

述語の分析から、述語に用いられる語彙の偏りや形、そしてどのような記述の仕方をするかということがわかり、社会科教科書を読むための日本語の支援や教材作成のための基礎資料となると考える。

研究成果の概要（英文）：This research examined the Japanese linguistic difficulties faced by junior high school student when seeking to understand their social studies textbook, from which they learn geography, history and civics. To investigate the lexicon and grammar in these texts, the information in the textbooks was first converted into texts and then entered into ChaMame, a morphological analysis support software designed to support Japanese linguistic studies. In particular, an examination was conducted on the kinds of predicates used in the text, and an analysis conducted on the relationships between these predicates and the narrative methods found in the texts.

研究分野：日本語学，日本語教育学

キーワード：年少者の日本語 中学社会科教科書 語彙 文法 教科学習支援

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

年少者の日本語教育に関する研究は小学生を対象とするものが多く、中学生に関するものは少ない。

中学生を対象とする研究のひとつに平成13年度から開始された文部科学省の研究がある。この研究では「日本語指導が必要な外国人児童生徒を学校生活に速やかに適応させるために、各教科の授業に参加できる日本語力の育成」を目的とするカリキュラムの開発が行なわれた。このカリキュラムには、日本語指導が必要な子どもが授業に参加して学ぶために、子どもたちに教科内容とその学びに必要な日本語を同時に学べるようにする授業活動の方法が書かれている。こうした研究の背景には、年少者の日本語教育は一般的に初級レベルで終了するものが大半であること、そのため日常会話ができれば、そのあとは学校の学びのなかで自ら学んでいけると思われてしまうということがあった。つまり、「日常会話ができて、授業にはついていけない」生徒が多くいたのである。しかし、この文部科学省の研究は子どもたちが授業に参加できるところまでしか考えられておらず、この先の実際の子どもたちの教科学習を考えると、そこにどのような日本語の困難点があるのか明らかにする必要があるといえる。

2. 研究の目的

本研究では、中学学齢期の子どもは少なくとも高校へ進学し学習が行え、可能であるならば大学へ進学できることが、彼らが日本社会で生きていくうえで大切であると考え、子ども自身が教科学習の教科書を用いて教科の内容について自分で学習できるようになることが重要であると考えた。

この研究では中学校で学習する教科のうち、社会科の教科書を分析の対象とした。中学校教科書の文章の難易度を判定すると、日本語教育の中級後半から上級後半に及び難易度である。語彙的な難しさだけでなく、それに合わせて文法的にも難しくなっており、教科書を読むためには初級レベルの日本語学習では十分ではないことがわかる。社会科の教科書を読むために具体的にどのような日本語の知識が必要であるか、特に文法面に関して調査・分析することとした。これまでの中学校教科書に関する調査・研究は語彙に関する研究がほとんどであるため、文法面から考える調査・研究が必要であるといえ、さらに、この学齢期の日本語学習者は日本語母語話者のような自然習得に頼ることは難しく、教科の教科書を読むためにつなげる文法を明示的に学ぶ必要があることから、教科の教科書の言語的な難しさを調査・分析することは意義があるといえる。

3. 研究の方法

中学校の社会科は、地理、歴史、公民にわかれており、それぞれに教科書がある。本研究では、地理は帝国書院、東京書籍、教育出版の計3冊、歴史は帝国書院、東京書籍、教育出版、育鵬社の計4冊、公民は帝国書院、東京書籍、教育出版、育鵬社の計4冊を分析対象とした。

各教科書をテキスト化し、そのデータを「茶豆」という形態素に解析するアプリケーションソフトを用いて形態素解析を行ない、リストを作成した。この形態素解析されたデータから形態素レベルでの品詞の分布などをみることができる。

さらに、子どもたちが初期の日本語学習で学習する語彙との比較を行なうために、一部の語彙(動詞、述語に用いられているもの)を形態素レベルではなく、単語レベルでとらえなおし、新たに単語レベルのリストを作成した。こうしたデータを用いて分析を進めた。

また、研究を進める途中で、年少者の日本語教育を行なっている方に聞き取り調査を行ない、研究の進め方などの参考にした。

4. 研究成果

各教科書について形態素解析を行ない、これらから地理、歴史、公民の分野別の形態素レベルの語彙のリストを作成した。作成したリストから主要品詞の分布をみると、いずれの分野も名詞が70%強、動詞が約20%、残りの約10%が形容詞、副詞、接続詞、連体詞となっており、分野によって大きな違いはほとんどなかった。

主要品詞である名詞、動詞、形容詞は各分野で取り上げられている内容にあわせた語彙が用いられており、特に分野による異なりがみられる。

一方で、接続詞に関しては、分野にかかわらず共通するものが用いられていた。地理では15種類、歴史と公民ではそれぞれ18種類の接続詞が用いられており、地理で用いられている15の接続詞は歴史にも公民にも用いられているものであった。また、歴史と公民の18の接続詞は、使用数に違いはあるものの、同じものであった。なお、歴史と公民にあり、地理にはなかった接続詞は「なお、もしくは、もっとも」であった。

「また、しかし、一方、さらに、そして」の接続詞はいずれの分野にも高頻度に用いられてお

り、文と文との関係や段落同士の関係を理解するために、教科学習の早い段階で学習しておくべき接続詞であるといえる。さらに、「あるいは、ただし、なお」は地理ではあまり用いられていないものの、歴史や公民を学習する際には多く用いられており、歴史や公民の学習の前には知っておくべき接続詞であるということがわかった。

分析を進めるにあたり、最初に作成した形態素解析のリストから、形態素レベルではなく単語レベルでとらえなおした分野別の動詞のリストを作成した。この動詞のリストにおいて、特徴度という指標を用いて、特徴度の数値が高い順に並べたリストと各分野に特徴のある動詞とそうでない動詞のリストを作成した。

動詞の特徴度は、先行して行っていた中学校数学教科書の動詞と比較してとりだした(図1)。

形態素解析後のリストを用いたため、図1にある上位の「いる(居る)、する(為る)、なる(成る)、ある(有る)」は本動詞での使用よりも、補助動詞として(～している、～ようにする・なる、～である)、使用されているものがほとんどであった。つまり、「いる(居る)」が数学と比べて特徴的であるというのは、「～している」という形で用いられている例が多くみられるということである。なお、どのような「～している」なのかという点については、下に記す別の分析でみている。

図1の分析からいえることは、社会科に特徴的な語は社会科の授業のなかで扱い、学習するほうが効果的といえるだろう。また、その際に扱うのは単語の意味だけではなく、どのような意味・用法なのかということも必要である。特に「～している」はその文法的な用法が多くあるというだけでなく、後で述べるように、どのような記述の仕方をするのかということにも関係しており、実際の文脈のなかで学習を進めたほうがいいといえる。

ただし、今回は数学教科書との比較から取り出したものであるため、全教科の語彙、あるいは国語の語彙と比較して特徴度を取り出すと、また別の面も見えてくるのではないかと考えられる。

1	見出し	社会科特徴語	数学特徴語
2	居る	社・特徴語	
3	為る		
4	成る		
5	有る		数・特徴語
6	因る	社・特徴語	
7	言う		数・特徴語
8	見る		数・特徴語
9	行う	社・特徴語	
10	作る		
11	行く	社・特徴語	
12	来る	社・特徴語	
13	考える		数・特徴語
14	出来る		数・特徴語
15	持つ	社・特徴語	
16	呼ぶ	社・特徴語	
17	つく		数・特徴語
18	使う		数・特徴語
19	対する	社・特徴語	
20	受ける	社・特徴語	

図1 社会と数学の特徴語の比較

地理、歴史、公民の分野別の特徴語についてもリストを作成した(図2)。図2は各分野に対して特徴度の高いものを並べたリストとなっている。地理で特徴度の高い「見る」は、本文では「みられる」の形で用いられており、「さまざまな気候がみられます」「大規模な農業がみられます」のように自発・可能の意味で用いられている。

「見る」は初期の日本語学習で学ぶ単語であるが、このような教科書で使われる意味については学んでおらず、注意が必要である。先にも述べたように、単語の意味だけではなく、どのような意味・用法なのかということも必要であることもわかる。

1	地理	地理特徴語	歴史	歴史特徴語	公民	公民特徴語
2	見る	特徴語	描く	特徴語	保障する	特徴語
3	居る	特徴語	現われる	特徴語	つく	特徴語
4	広がる	特徴語	支配する	特徴語	考える	特徴語
5	来る	特徴語	起こる	特徴語	選ぶ	特徴語
6	栽培する	特徴語	統一する	特徴語	有る	特徴語
7	位置する	特徴語	広まる	特徴語	於く	特徴語
8	利用する	特徴語	握る	特徴語	話し合う	特徴語
9	眺める	特徴語	率いる	特徴語	関する	特徴語
10	乾燥する	特徴語	与える	特徴語	出来る	特徴語
11	降る	特徴語	戦う	特徴語	定める	特徴語
12	集まる	特徴語	記す	特徴語	説明する	特徴語
13	読み取る	特徴語	始める	特徴語	基づく	特徴語
14	集中する	特徴語	開く	特徴語	解決する	特徴語
15	注目する	特徴語	倒す	特徴語	支払う	特徴語
16	出荷する	特徴語	作る	特徴語	買う	特徴語
17	生かす	特徴語	占領する	特徴語	働く	特徴語
18	流れる	特徴語	伝わる	特徴語	尊重する	特徴語
19	連なる	特徴語	説く	特徴語	生きる	特徴語
20	発達する	特徴語	対抗する	特徴語	反映する	特徴語

図2 各分野の特徴語

そして、教科書の記述の仕方についてみるために、本文の述語部分に注目して分析を行なった。目視で述語部分の単語の取り出しを行ない、動詞述語、名詞述語、形容詞述語(イ形容詞述語とナ形容詞述語)に分類し、それぞれの特徴を分析し、本文の記述との関係について述べた。地理教科書についての分析は学会発表を行ない、そのうえで論文を執筆した。

論文では、中学校の社会科教科書(地理、歴史、公民)に用いられている日本語がどのようなものであるか、生徒が教科書をよむためにどのような困難点があるのかということをおきらか

にするため、この論文では地理の教科書の述語形式に注目し、記述内容との関係について分析した結果を述べた。

地理の教科書では世界や日本の諸地域について具体的に述べられているものの、その地域の一般的・習慣的なことがらとして記述されており、非過去形を用いてテンスとしては「超時」となることがらが述べられていた。また、モノを主語とし、レル・ラレルの形の述語で述べる文も多く用いられていた。名詞述語文がその段落を読むためのトピックとして用いられていることや、名詞と変化の局面を表わさない「なる」が組みあわさった場合と名詞述語で述べる場合との違いについても述べた。

このような述語形式と記述内容との関連をすることは、教師や支援者にとって、生徒が教科書を読む際にどの部分に注意すべきか、どのような支援や教材作成をすべきかということにつながっていくものだと考える。たとえば、テンスに関しては、過去 - 現在 - 未来の時間と活用形の関係にくわえ、超時（一般的・習慣的な意味）と活用形について子どもたちは意識的に学ぶ必要があるだろう。また、受身文に関して、人が主語となる受身文だけでなく、モノが主語となる受身文や行為者（動作主）を背景化する受身文についても学ぶ必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 宮部真由美	4. 巻 12
2. 論文標題 中学校社会科教科書のテキストの特徴 地理教科書の述語の分析を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮部真由美
2. 発表標題 中学校地理の教科書における述語形式と記述の内容 内容理解の支援のために
3. 学会等名 日本語教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------